九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

韓愈における発憤著書の説

林田，慎之助

https://doi.org/10.15017/2332759

出版情報：文學研究. 70, pp.11-35, 1973-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

韓愈における発憤著書の説

林田慎之助

一

韓愈の文学は貫道の文学、載道の文学といわれる。韓愈の没後、彼の女婿李漢は遺文四一巻を編み、序文を著すが、その冒頭で「文は道を貫く器なり。斯の道に深からずして、焉(これ)に至る者有らず」とのべたのち、韓愈の文章改革の功績を賞揚して「雄偉常ならざる者」であると語っている。「韓柳文」の編者・明人の蔣之翹はそれに詳細な注をほどこし「韓柳集に注するの序」を加えているが、そのなかで韓愈、柳宗元の「文は道に非れば立たず、道に非れば充たず、道に非れば由らず。其の心は道と一なり」と語り、いずれの文章も道を載せるものであったと評している。

韓愈の文学を指して貫道主義、載道主義というのは、これからおこったものであるが、韓愈みずからは自分の文章をこのように規定することはたえてなかった。

論語のなかに、行いに余力あれば文を学べという孔子のことばが記録されている。これは、人間の実践行為を学問・文章に優先させる儒教の基本的な考え方を示すものとされてきた。直接的には生産性の微弱な学問・文章にくらべ、現実の課題の解決と密接にかかわり、必然的に人間の行動性を要請し喚起する道徳・政治により高い

価値を認識する態度はここから生れている。したがって、中国の伝統的な思念のなかにあっては学問・文章はつねに道徳・政治に従属する第二義的な事業としてしかみなされなかった。

この根強い伝統的な価値観の認識に、顚倒を迫った最初の時代と文学は、魏晋六朝のそれであった。今日の芸術至上主義にちかい思想が生れ、文章表現の修辞学を構造的に分析し、中国言語特有の音声の美しさを自覚して、それを文章表現に活用したリズムのあるうるわしい文章を創出したのも、この時代であった。その典型的な文章表現の様式は駢文である。それは言語の機能をフルにいかした修辞法、対句の妙味とリズムの諧和にくわえて典故の修飾に工夫を凝らした文章であったし、六朝このかた、散文の唯一の様式として韓愈が生きた中唐の時代までまだ根強いちからをもって、中国の文壇及び知識人の思考の枠組みを支配してきた。

韓愈はこの駢文を否定しただけでなく、魏晋六朝文学にまるっきり関心を示そうとしなかった。韓愈が門位の低い小地主層出身の新興官僚であり、そのことが門閥貴族がその主要な担い手であった駢文の様式に反撥させる理由ともなっているが、それよりも、韓愈をはぐくみ、彼のなかに持続した思想が儒教であったことが、文章表現にたいする韓愈の基本的な態度を決定的にしたと思われる。文章表現にこそ、その時代の士太夫の意識がもっとも明瞭に反映していることは、いつの時代にも変りはない。安史の乱を経過した中国の歴史的現実は、貴族官僚の無力さを徹底的に露呈させずにはおかなかったし、彼等の言語表現の様式であった駢文が、現実との対応のなかで人間の心を善意にむかって振いたたせるなんらのちからをもたないことを実証した。駢文の作家についていえば、すでに表現技術の瑣末にかかわってゆく意識があっても、人間いかに生くべきかという命題にかかわってゆく意識は放棄されていた。正統儒教の使徒をもって自認する韓愈は、中味のない空疎な美の形式をもてあそ

ぶ士太夫の意識には情況を直視して、それを変革しようとする使命感の緊張が欠落していることをもっともよく知っていた。

韓愈の思想を検討するさいに、しばしば引用される「原道」論文のどこをさがしても、別にとりたてていうほどの独自な発想もなければ、創造性に富む新鋭な思想の展開もみあたらない。その結語は道教、仏教の経典を焚きすて、その寺院を生活居住の場に開放し、先王の道を明かにして、寡夫、未亡人、独り者、身体障害者の福祉をはかるという具体的なあまりに現実的な提言で結ばれている。おなじように先王の道から出発して、宇宙論、人性論を包括するかたちで宋学が形成した思弁性のつよい形而上学の構想とは、韓愈は無縁であったとみえる。それでいて、韓愈が宋学の祖と仰がれるのは、彼が儒教の正しい道統を唐代において再興しようと考え、その実現につとめたからである。

堯舜以来の正しい儒教の道統は孟子まで継承されてきたものの、それ以後は断絶してしまったとみる韓愈の認識は、そのまま朱子の思想の中核につながっている。韓愈が「原道」で「斯れ吾が謂う所の道は向に謂う老仏の道に非ず、堯は是を以てこれを舜に伝え、舜は是を以てこれを禹に伝え、禹は是を以てこれを文武周公に伝え、文武周公はこれを孔子に伝え、孔子はこれを孟軻に伝う。孟軻の死してその道を得ず」というのが、それである。儒教の道統が孟子で断絶したと考えるのは必ずしも韓愈の独自の発想ではない。安史の乱を経てはじめて出現した韓、柳の前駆的古文家たち、例えば、李華、韓愈の兄韓會の意識のなかに、すでに顕在していた。[1] これらの前駆的古文家と相異して韓愈が独自であるのは、儒教の正しい道統が孟子で途絶えた理由として、秦の始皇帝の焚書と漢にはじまり魏晋六朝の思想界を風靡した道教、とりわけ仏教の隆盛をあげていることである。

仏教にむけられた韓愈の執拗な排撃の態度には怨念にちかいものがある。これは彼の生涯を貫いて持続している。なかでも最も象徴的な事件は「仏骨を論ずるの表」を奉って憲宗の怒りにふれ、あやうく一命をとりとめて潮州刺史にながされた事件である。

元和十四年（八一九）憲宗皇帝が釈迦の指骨・仏舎利を鳳翔の法門寺から迎え禁中に祀って自ら三日間の仏事をおこなった。熱狂的な信者のなかには臂を焼いて供養するものさえでたと伝えられている。韓愈は仏教を夷狄の法とみなして、「乞う。之を有司に付し諸を水火に投じ、永に根本を絶ち天下の疑いを断ち後代の惑を絶ち、天下の人々をして大聖人の作為する所の尋常を出ずること萬々なるを知らしめば、豈に盛んならずや、豈に快からずや。佛に如し霊ありて能く禍祟を作さば、凡ての殃処に宜しく臣が身を加うべし」と上奏して憲宗の飜意をうながした。時に彼は五二歳で刑部侍郎の要職についていた。元和六年（八一一）河南の令から尚書職方員外郎となって中央政府に帰って以来、元和八年（八一三）に比部郎中史館修撰、同年さらに考功郎中知制誥の任につき、元和十年（八一五）には中書舎人に転じ、その後太子右庶子に貶されることはあったが、刑部侍郎に栄進するまで実に順調な昇任であった。進士登第後ながくにがい不遇の時代を経験しなければならなかった韓愈にとって、この時期はもっとも得意な時期であったといえる。その絶頂にあって、一身の不利をかえりみずに、あわや死罪に処せられるような上奏に韓愈をかりたてたものこそ仏教排撃の怨念があった。その怨念をささえていたのは、正統儒教思想の継承者としての使命感であり、「儒教おとろえて国あやうし」の危機感であった。

潮州の僻地にあって韓愈の唯一の話し相手となった人物に大顛と称する老僧があった。韓愈が転向して仏氏を奉ずるようになったという噂さがながれたのはそのためであった。潮州流寓後一年足らずして、元和十四年（八

一九）の冬、韓愈は袁州刺史にうつされているが、その翌年、孟尚書、字は幾道という好仏家が韓愈の仏教入信を伝えきいて彼に書簡をよこしている。それに答えたのが、「孟尚書に与うるの書」である。そこで韓愈は自分の儒教徒として変りない所信をつぎのように披歴している。

漢氏より已来、群儒区区として百孔千瘡を修補し、随って乱れ随って失う。其の危うきこと一髪の千鈞を引くが如く緜々延々として濡って以て微滅す。是の時に於て、釈老を其の間に唱え、天下の衆を鼓し之に従わしむ。嗚呼、其れ亦た不仁なること甚し。釈老の害は楊墨より過ぎたり。愈の賢は孟子に及ばず。孟子之を未だ亡びざるの前に救うあたわずして、韓愈乃ち之を已に壊るるの後に全うせんと欲す。嗚呼、其れ亦た其の力を量らず、且つ其の身の危きを見て、之を救うこと莫く以て死せん。

ここには、孟子没後破壊されてしまった儒教の道統を再興しようとする韓愈の気慨が挫折の後だけにふかい絶望のかげりを帯びて語られている。

韓愈に「王秀才を送るの序」という文章がある。そこにも儒教の道統説が詳細にのべられている。

孟軻は子思を師とす。子思の学は蓋し曾子に出ず、孔子没してより群弟子の書有らざる莫きも、独り孟軻氏のみ伝えて其の宗たるを得たり。故に吾は少くして焉を観るを楽しむ。太原の王塤の予に為る所の文を示すに、好んで孟子の道う所の者を挙ぐれば、之れと言って信に孟子を悦び、屢々其の文辞を賛う。夫れ河に沿うて下り、苟にも止まらざれば遅疾有りと雖も、必ず海に至らん。如し其の道を得ざるや疾くして止まらざると雖も、終には幸にして焉に至ること莫からん。故に学ぶ者は必ず其の道とする所を慎め。楊墨老荘佛の学を道として、聖人の道を之かんと欲すれば、猶お断港絶潢を航し以て海に至るを望むがごとし。故に聖人の道を観

んことを求むれば必ず孟子よりせよ。

楊・墨・老・荘・仏教を異端思想として斥け、ひたすら孔子、曾子、子思、孟子と継承されてきた先王の道を復興しようという意識は、韓愈において見事に一貫しており、その意識において孟子の学は出発であるとどうじに帰結でもあった。

孟子に始まり孟子に尽きる理念である先王の道について、韓愈は「原道」において自問自答し、「夫れ謂う所の先王の教えとは何ぞや、博く愛することをこれ仁と謂う。行いて之を宜しくするをこれ義と謂う。是(これ)に由りて焉(これ)を之(ゆ)くをこれ道と謂う。己に足りて外に待つこと無きをこれ徳と謂う。其の文は詩・書・易・春秋。其の法は禮・楽・刑・政」と解析している。

先王の道に帰することが原道であるとすれば、博愛と当為の精神を自己の内側に求めることで、けっして外にたのむことのない徳を士太夫の意識のなかに樹立しようとする「原道」の主張が儒教思想の原則の再確認であったのはむしろ当然であった。それをあらためて確認するかたちでしか、当時の士太夫の意識が情況に対応しそれを変革してゆくちからをもちえないとみていた韓愈の認識の視点こそが重要であった。詩・書・易・春秋の経典に或いは古代の文物制度に、先王の道の具体的表現をみて、秦漢から六朝にかけて楊・墨・老・佛の思想が混入して正統儒教の理念が不純になってしまったと考える韓愈が、その不純の形成過程で生産された四六駢驪文に古道の象徴的な衰退をみてこれに反対し、先秦以前の古文にもういちど帰ることで新しい散文を作ることを使命と課し、そのために全力を傾注したこともまた必然であった。

韓愈は「李秀才に答うる書」のなかで、「愈の古に志す所は惟其の辞をこれ好むのみならず、其の道を好めば

なり」といっている。「欧陽生を哀しむの辞の後に題す」の文でも、「愈の古文を為めるは豈に独り其の句讀の今に類せざる者を取るのみならんや。古人を思いて見るを得ざれば、古道を学んで則ち兼ねて其の辞に通ぜんと欲す。其の辞に通ずる者は本もと古道に志す者なり」とのべ、さらに「李翊に答うる書」のなかでは、「三代両漢の書にあらざれば敢て見ず、聖人の志にあらざれば敢て存せず」と云い切っている。これからすれば、韓愈の古代への関心はもっぱら古代の思想にあったとみえる。それにしても彼が古代への関心を語るとき、いずれもの発言がその対象と時を異にしているにもかかわらず、古代の句読、つまり文章表現の様式とのかかわりにおいてなされていることに留意せねばならぬ。古の道の体得と古の文章表現の吸収は韓愈において表裏一体であったことをこれは示している。

韓愈は「原道」「原性」の一連の論文を著してはからずも宋学の祖と仰がれる存在となるが、これまで考察してきたように、韓愈は儒教の正統思想の継承者としての自負と使命感をささえとして、そこから仏教、老荘等の異端思想にたいして果敢な挑戦をおこなってきたものの、独自な儒教による思想の構想とその体系樹立の意志をもち、それを実現した思想家であるとは認めがたい。韓愈は帰するところ文学者であり、そのことにおいて偉大な変革者であった。韓愈の「原道」表明が博愛と信義の精神を自らの内面に培養し、それを他に及ぼそうとする人間復興の宣言であるとすれば、彼の文学は中国固有の正統的な思想の純一性によってモラルの回復と確立とをねがうモラリストの表現行動であり、その意識変革の切実な願望はそのまま文体改革への意欲的な情熱となっているといえるであろう。

二

韓愈は唐の代宗の大暦三年（七六八）に生れているが、三歳のとき、父の秘書郎・韓仲卿をなくしている。その後の彼の養育は二八歳の年令のひらきがあり、その時すでに官途にあって将来を嘱目されていた長兄の韓會にたくされることになる。ところが、この韓會も韓愈一四歳のおり、つまり建中二年（七八一）に元載、王晋の党とみなされ、元、王失脚に連坐して危く一命をとりとめたものの、刺史として流謫された韶州の地で病死する。そのため、これも韓愈と同じように、すでに孤児となっていた次兄の韓介の子・老成と一緒に、韓會の庄園があった江南・宣城の地に兄嫂鄭氏にともなわれておもむき、そこで韓愈が科挙の試に応ずるまでくらした事情は、彼の「十二郎を祭るの文」にくわしい。

旧唐書の本伝によれば韓愈は七歳のころから書を読み文を作ったが、別にきまった師につくでもなく、ほとんど独学であったという。後年、彼が三八歳のときに書いた「李兵部侍郎に上るの書」をみると、「愈、少くして鄙鈍、時事に於て都通暁せず。家貧しく以て自ら活くるに足らざれば、挙に応じて官を覓めること凡そ二十年。薄命不幸にして動すれば讒謗に遇い、寸を進んで尺を退き、卒に成す所なし」と自から語っているように、兄嫂の世話になって生計をたてていた韓愈は一日でも早く自活の道をえて、その労にむくいようと考え、そのため科挙の試験に応じて官吏になることを求めていた。その受験のために長安に上京したのは貞元二年（七八六）・韓愈一八歳のときであった。それから六年の間、何度か受験しては失敗し、刻苦勉励の苦学生活の末に、二五歳で進士科に及第している。当時は進士科に及第しただけではすぐに中央政府の官職につけない制度であったので、さらに上の博学鴻詞科の試験をめざしたが、三度受けて三度とも失敗している。

そのときの自分の不遇不運を嘆ち、宰相に聞達を求めるために書簡をたてまつること三度に及んだが、ついに

むくいられないままに終っている。それが今日伝わっている貞元十年(七九四)に書かれた「宰相に上るの書」である。韓愈はそのなかで、「今、人と生れて二十八年有り。名は農工商賈の版に著れず、其の業は則ち書を読みて文を著し、堯舜の道を歌頌す。雞鳴きて起き、孜々として亦た利の為にせず。其の読む所は皆聖人の書にして楊・墨・釈・老の学は其の心に入る所無し。其の著す所は皆六経の旨を約にして文を成す。邪を抑え正に與し、時俗の惑う所を辨じ、窮に居し約を守る。亦た時に感激、怨對、奇怪の辞有るは以て天下に知られんことを求むればなり。亦た教化に悖らず、妖淫、諛佞、譸張の説はその中より出ずる所無し」とのべ、自薦自推をおこなっている。当時にあって自薦自推の行為は必ずしも珍らしいことではなかった。あらかじめ自己の抱懐する志と文章の才能を試験官に知らせるべく種々の手段がとられ、伝奇小説のかたちすら利用された事実はよく知られているところである。これでもって韓愈を非難するむきがあるのは間違っている。むしろ三度にわたる上書におのずから韓愈の苦境がつたえられているし、仕官にたいする強い執着があらわれている。その頃、韓愈は知己の崔立夫にあてた書簡のなかで、「夫れ所謂博学なるものは豈に今の謂う所の者ならんや。夫れ所謂宏辞なるものは豈に今の謂う所の者ならんや」と、博学鴻詞科に合格した者の文章と自分の文章を比較して嘆き、もし古の豪傑の士である屈原、孟軻、司馬遷、相如、楊雄がこの試験を受けてとおったとしても、自ら慙じて進まなかったにちがいないと当時の博学鴻詞科の実体をあざけっている。「六経の旨を約し、文をつくる」韓愈の文章表現が独自のスタイルであったため、かえって他者にいれられないことの自負がそこにのぞいてもいる。六経を読み、屈原楊雄、司馬遷の書を学ぶことは科挙の試に応ずるためにかかせない基本的な教養であったであろう。それは独り韓愈だけではないが、師につくこともなく、独学で基本的な教養を身につけ科挙の試に応ずるところまで、その

学習に打ちこんだ韓愈は、とりわけつよくそれに規制され、六経の文章、西漢以前の文章表現の様式を学びとっているうちに、それをすっかり自分のものにしてしまったふしがある。例えば「宰相に上るの書」のなかでも、詩経や孟子のことばをそれとはっきりことわって、たびたび引用しているが、それはそれで韓愈の文体のなかにすっかり溶解しており、「詩経曰く」「孟子曰く」といった引用のことわりがきがなかったならば、韓愈のことばそのものと見紛うほどである。

総体的にいって、韓愈の文章は典故をつかうことは少ないが、典故することがあっても、常識をこえた典拠をもとめないし、それだけにわざとらしい工夫の迹がない。自分の云いたいことがはっきりしていて、その過程で自然に血肉化している孟子や楊雄のことばが、自分の文脈からはずれずに口をついてでてくるといった文章である。これは典故を繁用し対句の工夫に気をとられて主旨が達しにくい六朝風の文体とは趣きをことにしていた。そのような文章表現を当時の博学鴻詞科の詮衡が受けいれるところまでまだきていなかったところに韓愈の不幸があった。博学鴻詞科は官吏になって自活の道をきりひらき、天下に自分の志をとうためにどうしてもとおらねばならぬ関門でありながら、その関門を通ることを阻害しているのが自分の文章表現であるという矛盾に韓愈はたたされていた。しかしこのような矛盾は韓愈が儒教の徒であり、現実的な課題のなかで問題の解決をもとめるかぎり、つねにつきまとうものであった。

太田次男氏は三たび宰相に自薦した韓愈の書簡にふれて、「こういう種類の文章を乞食の文章として、極端に軽視し、たまたまこの種のものが残されていることを韓愈のために惜しみ、さらに決してこれが韓愈文学の本質でないとする意見がある。しかしこれは必ずしも当を得たとはいえまい。三上書は元来、韓愈の品性の高下とは

何の関係もない。むしろ彼がこういう文章を書くことによって、文学生活―仮りにこう名づけて―の出発点とした悲劇性こそむしろ注目しなければならぬ」と指摘されるのは正しい。このように論じる太田氏の「韓愈についての一考察」は韓愈の官人生活を中心としてのべられたものであるが、そのなかの見解には傾聴すべきものが多い。[2] ただしかし、さきほどの指摘につづいて、「韓愈文学の原型はこれが書かれた二十八歳の頃までに既に出来上ったとみてよいであろう」という発言には納得のゆく論証がなされていない。韓愈文学の原型が確立するのはむしろこの二十八歳の時を出発として、自分の不幸が荷わねばならなかった悲劇性の意味を告発しつづける過程であって、そのためにはこれからほぼ十年の歳月を必要としたと考えられる。それは元和元年、韓愈が権知国子博士の官位を獲て、中央政府に召されるまでのながい地方官時代と重なっている。この間に、韓愈は彼独自の〈不平の文学〉論を、〈愁思の美学〉説を構築しているからである。

今日残っているもので、此の十年間の韓愈の文学思想をうかがえる資料をあげれば、上宰相書（貞元十年）、重答張籍書（貞元十二年）、與馮宿論文書（貞元十二年）、答李翊書（貞元十八年）、送孟東野序（貞元十九年）、答竇秀才書（貞元十九年）、上李兵部侍郎（永貞元年）、荊潭唱和集序（永貞元年）などがある。

さて博学鴻詞科の試に失敗した韓愈は貞元十二年（七九六）に宣武軍節度使・董晋に従い、その観察推官とし汴州の地に赴くことになるが、貞元十五年（七九九）董晋がなくなると、その年の秋、徐州の節度使・張封建をたよってその属僚となり、そこで約一年間くらしている。さらに貞元十七年（八〇一）に四門博士に任命されて京師に復帰。つづいて監察御史に遷るが、そのとき京兆の尹・李実の暴政を弾劾して、まもなく陽山の令に左遷されている。そこからさらに韓愈は江陵府の参軍に移されることになる。

中国の歴代の士太夫がいずれも中央政府の官僚となることをめざしているが、韓愈もその例外ではなかった。というより韓愈はその志向においてより強烈であった。この視点からみれば、韓愈の地方官生活は博学鴻詞科受験失敗後にあきらめて汴州に下ったときと、所謂失意の生活であることでは変りはなかった。韓愈に「雑説」四首と題する寓意文があるが、この四首のなかでもいちばん人口に膾炙しているのは第四首の伯楽と千里の馬の説話である。〈一日に千里を走る馬も、伯楽のような馬の相をよくみわけることのできる人物にあわなければ駄馬なみにあつかわれてついに馬小屋の中に朽ち果ててしまう。世の中の人は千里の馬がいないというが、千里の馬がいてもそれをみわける一人の伯楽がいないのだ〉という話であるが、ここには才能ある人間もそれを認めて活用する人がいなければせっかくの才能を発揮できぬまま世間に埋もれてしまうという寓意が託されている。この寓意文がいつごろ書かれたかはさだかではないが、二五歳の韓愈が当時「龍虎の榜」として騒がれた科挙の試験にとおりながらも、それから十年の間まともな官職につけず、地方の官を遍歴しなければならなかった失意の原体験があってはじめてつくられた寓話であったにちがいない。

貞元十八年（八〇二）、はじめて中央政府に属する四門博士の官についた韓愈に、中書舎人・権徳輿をたすけて科挙の試験を主管していた陸傪が人物推薦を依頼している。韓愈はそれに応えて、「祠部陸員外郎に与うる書」をあらわし、侯喜、李紳、李翊等十人を推挙している。韓愈はそれぞれに推薦理由のことばをつけ加えたあとに、「往昔、陸相公は貢士を司り、文章を考するに甚だ詳かなり。愈は時に亦た中に在り得るも未だ陸の人を得るを知らず。其の一・二年にして、與に及第する者は赫然として聲有り。其の所以を原ぬれば亦た梁補闕粛、王郎中礎これを佐く。梁は八人を挙げて失う者有ること無し。其の餘は王の皆謀に與かる。陸相の文章を考するや甚だ

詳かなるも、梁と王とを待って此の如きは疑いなし。梁と王との人を挙ぐること此の如きは當に今に至るも美譚と為すべし」とのべている。韓愈の登第をふくめて「龍虎の榜」と世に称せられたこの期の主査と副査に、文章のめききである陸贄と梁粛、王礎がいた。なかでも梁粛は韓愈の兄韓會、柳宗元の父柳鎮と交友があり、唐代古文形成期にあって元結、獨孤及とならんで重要な役割をはたした古文家であった。[3] さらに旧唐書韓愈伝は、若き日の韓愈が梁粛、獨孤及の徒に従って文章をみがいていたと伝えている。この二人の開係を「伯楽と千里の馬」の寓意になろざえれば、梁粛は韓愈にとって文章のめきき伯楽であった。権徳輿を補佐する陸傪にかくあれと望む韓愈もみずから伯楽たろうと願っていたのであろう。韓愈は登第後、同期の仲間が一・二年の間に赫々たる名声をあげたのに反し独り苦しい失意の時代がそれからつづいただけに、後進の頼る者あればこれを導き、才能識見にすぐれる者あれば推挙登用の労を惜しむことはなかった。そのことは、彼が張籍、孟東野、李紳、賈島、李賀などの朋友後輩の文学者たちの世話をよくみた事実、先の書簡で推挙した十人の内九人までが次々に時を異にしながらも登第した事実が如実に保証している。韓愈が当時とかく非難のむきがあった「師の説」を立論してはばからなかった確信もその辺にあったと思われる。

さて博学鴻詞科に失敗後、董晋に従って汴州にくだり、その幕客をつとめていた時代は韓愈にとって失意のもっともふかい時期であった。貞元十年(七九四)には育ての親であり、韓愈の出世をいちばん期待していた兄嫂の鄭氏がなくなっているし、その翌年には、長安の苦学生活時代から彼の親しい詩文の友であった李観が年二九才の若さで、京師においてみまかっている。その死後にかかれた「李元賓(観)墓銘」がその叙述を簡略の極にとどめることでかえって、ふかい哀傷を表現していることについては、吉川幸次郎氏の「唐代の詩と散文」にくわし

い。このときたしかに韓愈には時をえないという感慨よりも、独りとりのこされてゆくやりきれない寂寥感にとざされていたにちがいない。友人の張籍が汴州における韓愈が博奕を好み、雑駮な文章を作っているときいて、儒教の大道を明らかにする大著を作ってほしいと諫めたのもこのときであった。それにたいして韓愈は、「重ねて張籍に答うるの書」をおくり、「古人の書を観るに、其の時を得て其の道の行わるれば則ち書を為る所なし。書の皆為る所は今に行われず、後世に行わるる者なり」とこたえている。志をえず、道も又行われないなかでこそ、書物は著述さるべきもので、現実におこなわれずとも、それは後世の知己を待つものだというのはたしかにそうではあるが、汴州で失意にとざされかなり頽廃的な生活に身をひたしていたときのことばだけに、そのことにすがり、おのれを振いたてている韓愈のつまだちがみえるようである。それにしても、古文の名のもとに独自な変革を試みる文章表現はこのときの韓愈にとって唯一の生きていることの証であったことはたしかである。

やはり汴州の時期の作とされたものに、韓愈と同年の進士「馮宿に与えて文を論ずるの書」がある。

僕は文を為ること久し。自ら意中に称う毎に、以て好しと為せば、則ち人は必ず以て悪しと為す。小しく意に称えば、人は亦た小しく怪しむ。大いに意に称えば、則ち人は必ず大いに怪しむ。時々、事に応じて俗下の文字を作し、筆を下して人をして慙ずからしむるも、人に示すに及べば、則ち人は以て好しと為す。小しく慙ずれば亦た蒙けて之を小しく好しと謂う。大いに慙ずれば、則ち必ず以て大いに好しと為す。知らず、古文の直ちに何ぞ今の世に用いらるるを。然るを以て智者の知るを竢つ。昔、楊子雲は大玄を著すも、人は皆之を笑う。子雲の言に曰く、世は我を知らざるも害う無し、後世に復た楊子雲有りて必ず之を好しとすと。子雲の没して千載に近し。意うに未だ楊子雲有らざるは歎くべし。其の時、桓譚は亦た雄の書を以て老子より勝れり

と為す。老子は未だ道うに足らず。子雲は豈に老子と彊を争うのみならんや。此れ未だ雄を知らざる者なり。其の弟子の侯芭は頗る之を知り、其の師の書を以て周易より勝れりと為す。然るに侯の他の文は世に現れず、其の人は果して如何なるかを知らず。此を以て言えば、作者は人の知るを祈わざるや明かなり。直ちに百世ののちに以て聖人を竢って惑わず、諸を鬼神に質して疑わざるのみ。足下豈に然りと謂わざらんや。李翺は僕に従いて文を学び頗る得る所有り。然るに其の人は家貧しく事多く、未だ其の業を卒ぐる能わず。張籍なる者有り、年は翺より長じ、亦た僕に学ぶ。其の文は翺に相い上下す。一・二年之を業とせば至るに庶幾からん。然るに其の俗尚を棄て寂莫の道に従い、之を以て名を時に争うを閔む。久しく談ぜざれば聊か足下に感じて自ら此に進め、故に憤りを発して一すら道う。愈、再拝す。

これをみても、孤独な失意のなかにあって韓愈の関心は自分の志す文学の道であり、俗尚に逆う文章表現であったことが知られる。韓愈の文章表現が世間のこのみと齟齬していた事実をこれほど訴えているのはめずらしくその意味でも貴重な資料である。やりきれない憤懣を楊雄に托して後世の知己を待とうとする韓愈のことばは孤独な単独旅行者のふかい悲愁にみちている。それとともに、「百世ののちに、聖人を竢って惑わず、諸を鬼神に質して疑わざるのみ。足下は豈に然りと謂わざらんや」というたたみかけるような訴えは文章表現に自分を賭けてきた者のゆらぐことのない雄々しい自負からであろう。それにつづいて同じ古文の道をあゆむ弟子の李翺と友人の張籍を賞讃しているが、「其の俗尚を棄て寂莫の道に従う」と評しているのは韓愈自身の姿でもあった。このとき、寂莫のなかにあって、百年の後に再び韓愈のあらわれるをまつというほかに自らをはげますことばはなかったのであろう。

発憤著書の語を韓愈が吐くのはここだけでない。後漢の王充、王符、仲長統の三賢を賛えた文に、「後漢三賢賛」があるが、そのなかの仲長統の賛で、「初め尚書郎に挙げられ、後に丞相の軍事に参ず。卒に榮に至らず、古今を論説して憤りを発して書を著す」と論じている。また雑説四首の第三首に「談生が崔山君伝を作る」の説話があり、ここにも、「談生が崔山君伝を為りしに、鶴のもの言うと称えるは豈に怪しからずや。然れども其れ人を観るにその能くその性を尽して禽獣異物に類せざる者は希なり。將た世を憤り邪を嫉み、長しく往きて來たらざる者の為る所か」とのべ、発憤著書の説を説話の主眼においている。発憤著書の説はすでに司馬遷の「太史公自序」にみえる。「昔、西伯は羑里に拘えられて周易を演べ、孔子は陳蔡に戹められて春秋を作る。屈原は放逐せられて離騒を著し、左丘は失明して厥の国語有り。不韋は蜀に遷されて世に呂覧を伝う。韓非は秦に囚えられて説難・孤憤有り。詩三百篇は大抵聖賢の発憤して為作る所なり。此れ人みな意に鬱結する所有りて、其の道を通ずるを得ず。故に往事を述べ来者を思うなり」と語る司馬遷もまたこの説に「史記」創作の動機を托したのである。韓愈はこの司馬遷の発憤著書の説によほどふかい共感をもっていたらしく、その他いろんなところで、この言葉をつかっている。貞元二十年(八〇四)に書かれた「竇秀才に答うるの書」をみると、「愈少くして駑怯他の芸能に於て自ら度りて努力すべきこと無し。又時事に通ぜず世と齟齬すること多し。終に以て樹立すること無からんことを念い、遂に発憤して篤く文学を専にす」とあり、韓愈は文学の道に専念して、そこに自分の志を樹立しょうとした動機を、若いときから自分が時事に不明で世間と喰い違う失意のなかで発憤したからだととらえている。この発言はきわめて重要である。なぜなら、このような韓愈の発憤著書の説を主観的に消化して、それを独自の文学創作論として構築したのが、貞元十九年(八〇三)に書かれた「孟東野を送るの序」の〈不平の

文学〉論であり、その翌々年の永貞元年(八〇五)にあらわされた「荊潭唱和詩に序す」にみえる〈愁思の美学〉説であったからである。

三

貞元十八年(八〇二)に、五十才にちかい友人の孟東野がはじめて江蘇省溧陽県の尉に任ぜられ、その任地におもむくことになるが、そのさいの官位にあきたらぬ孟東野の不平の気持を察した韓愈が不遇不平のなかからこそすぐれた文学が生れてくるのだと慰めたのが、この「孟東野を送るの序」である。貞元十九年(八〇三)といえば韓愈は京師に帰り四門博士の職についていたが、こしかたの苦労の多かった地方での幕客不遇の時代に思いをいたすとき、反対に都を出てゆく白髪まじりの孟東野を慰めはげまさずにはいられなかったのであろう。その書き出しで、「大凡物のその平らかなるを得ざるときは則ち鳴る」というのは、草木風水から四季の自然現象にわたって、物はすべて平衡を失ったとき美しい音色を出すからである。これは人間においても亦たおなじであると韓愈はみる。〈人間は平衡を得ているときはみちたりているから言葉で表現する必要はない。逆に、不平や憤りがあってどうしても、ものいわねばならぬ胸の思いがつきあげてくるときに、それは表現のかたちをとる。言語こそ人間の聲の精粹であり、文辞こそ言語の精粹である〉とのべ、ついで韓愈は最も善く鳴った過去の文学者の歴史を語ることになる。それは偏向性のつよい独自の価値観で貫かれていて、秦漢で善く鳴ったものとして李斯、司馬相如、司馬遷、楊雄をあげているのはよいとしても、「其の下魏晋氏、鳴る者は古に及ばず。然れども未だ嘗って絶えず。就いその善き者も、その聲は清にして巧なり、その節は数にして急なり、その辞は淫にして哀なりその志は弛にして肆なり、その言たるや乱雑にして章なし」と、魏晋六朝時代の文学にたいする批判はなかなか

にてきびしい。唐になると、陳子昂、蘇源明、元結、李白、杜甫、李観を推賞し、それより以降、現存する文学者で詩をもって鳴る者に孟東野をあげ、魏晋よりも文学的風格があり、漢代さえおかしていると賞揚をおしまない。一方、李翺、張籍をその左右にすえて、これまた善く鳴る文学者の尤とみなしている。秦漢、唐では善く鳴る文学者の具体名を例挙しているにもかかわらず、魏晋六朝に至っては全くそれをしていない。韓愈は宋代の文人が一般的に陶淵明を例外として魏晋六朝の文学を全否定する傾向が強くうかがわれるのにくらべると、善く鳴る文学者がこの時代にも存在していたことを認めながらも、それが充分に力を発揮できなかったのは天の采配であると考える。かかる考え方のなかには、魏晋六朝の時代は老佛の思想が支配的なちからをもち、儒教の道統がそれによって逼息せしめられており、その思想の情況をそのまま反映したのが、この時代の文学であるという認識がある。この認識から韓愈が自由になれないところに、彼の文学史観の一つの偏向性があり、それがまた韓愈の文学に独自な緊張をもたらすことになる。

この序にあらわれた具体的な偏向性をさらに掘り下げてみよう。唐代の文学にふれて、韓愈は「唐の天下を有してより、陳子昂、蘇源明、元結、李白、杜甫、李観、皆能くする所を以て鳴る」と語っているが、李白、杜甫をのぞいていずれもみな唐代屈指の古文家である。李白、杜甫を唐代文学の傑出した文学者とみなすのは、今日ではむしろ常識であるが、いまだ李杜の評価が充分に定まらない中唐期にあって、「李杜に文章在り、光燄万丈に長し」(調張籍)と歌ったのは韓愈その人であった。達眼というべきである。問題は古文家文人の評価にある。陳子昂は当時から唐代古文家の先駆的存在とみなされていたし、蘇源明、元結、李観は韓柳出現以前の古文形成期の文学運動に参加しそれを推進してきた文学者である。唐代古文運動の形成過程については別に論稿を予定し

ており、そこで充分に意をつくすつもりであるが、今ここでは必要最小限にとどめて、それにふれておくことにする。韓柳の古文完成期を古文運動の第三期とすれば、それ以前の古文形成過程は第一期と第二期にわけて考えることができる。第一期には安史の乱の共有経験をもとにして時代情況の復興を志した中小地主層出身の官人文学者のグループ・李華、蕭穎士、顔真卿、賈至、獨孤及、それに蘇源明、元結がいて古文の駒をすすめている。第二期に入ると、安史の乱体験をもたない世代が担い手となるが、第一期の古文運動のモチーフを踏えて、その意義を積極的に継承し直接に韓愈に運動をひきわたす官人文学者の群が輩出する。韓愈の兄の韓會、その僚友の梁肅を中心に沈既済、徐岱、李観、蕭存等が肩をならべて古文を展開することになる。ところが、この中でも、もっとも傑出した古文家である李華、蕭穎士、獨孤及、梁肅の存在は韓愈の唐代文学評価の視野から完全に切りおとされていて、今日に残る資料では、元結、李観は別として、より力の微弱な古文家とみられる蘇源明が、単に先駆者であるというだけで陳子昂がとりあげられているのはどうしたことであろう。とりわけ旧唐書巻一六〇の韓愈伝によると、「愈自ら孤子を以て、幼くして刻苦して儒を学び、奨勵を俟たず。大暦貞元の間、文学多く古学を尚び、楊雄、董仲舒の述作に効う。しこうして獨孤及、梁肅は最も淵奥と称せられ、儒林に推重せらる。愈は其の徒に従って游び、鋭意鑽仰して自ら一代に振わんと欲す」とあるように、元結をとりあげれば、当然この獨孤及、梁肅をあげねばならぬはずである。にもかかわらずこの二人とともに李、蕭までも切り落した韓愈の偏向性の意図はどこにあったのであろうか。黄雲眉氏の「韓愈柳宗元文学評価」に「陳寅恪先生が韓愈を論じたのを読む」と題する批判論文が収められている。そこで、黄雲眉氏は李華、蕭穎士、梁肅、獨孤及が仏教とかかわりがあった事実を論証し、これらの古文家をひとしなみに攘夷思想の所有者だとみる陳寅恪氏に反論を加えてい

る。[4] 韓愈が頑固なほど一貫して排撃しつづけたものに仏教があることはさきに述べた。「孟東野を送るの序」で、古文家評価の視野からこの傑出した四人の古文家が消去されたのは、彼らが仏教信者であったからだとすれば、かくも韓愈の文学史観ははじめから偏向性にみちていたことになる。

もともと、平らかならざるものがすぐれた文学を生むという不平の文学論それ自体が、文学創造のすべての動機ではありえないはずなのに、それがすべてであるかのように発想する韓愈は自己体験を固執する偏向性の顕現者いがいのなにものでもない。この徹底した偏向性の固執を韓愈が必要としたほどに、唐代の文学はまだ魏晋六朝文学の余風を脱却しきれないでいた。それは、単に先秦以前の経典の文章を学び、秦漢の文体をそのまま中唐において復活させることぐらいでは、どうにもくずせない文学情況であった。韓愈の文章には中国語のリズムを充分に活用した六朝の駢文のエキスを否定的に摂取した痕跡がある。宋人の陳師道は「后山詩話」のなかで、「杜の詩は法なり、韓の文は法なり。詩文それぞれ體有り。韓は文を以て詩と為す、杜は詩を以て文と為す。故に工(たく)まざるのみ」という黄庭堅の評語を引いているが、[5] その批評のごとく、韓愈の散文は簡潔にして要を得た秦漢期の文体を基幹としながらもたくまずして詩的なリズムを内在させていて、はりのある独特の散文体をねりあげている。そこにゆらぐことのない独創家のみの知る確信があり、それが彼の偏向性をささえて、ゆずることのない文章改革への情熱となって持続することになる。

韓愈に「劉正夫に答うるの書」があり、いまこの書簡がいつごろ書かれたものかつまびらかではないが、韓愈の文学思想を知るうえに重要な資料の一つである。このなかに韓愈の文学史観があらわれていて、それが「孟東野を送るの序」の〈不平の文学〉論とかかわってくるので、それについて少しく考えてみたい。

夫れ百物の朝夕に見る所の者は人皆注視せず。其の異なる者を観るに及んで、則ち共に観て之を言う。夫れ文は豈に是に異ならんや。漢朝の人は能く文を為らざるは莫し。独り司馬相如、太史公、劉向、楊雄のみは之を為りて最れたり。然らば則ち功を用いることの深き者は名を収むるや遠かなり。若し皆世と沈浮し、自ら樹立せざれば、当時の怪む所とならざると雖も、亦た必ず後世にこれ傳わることなきなり。

足下の家中の百物皆賴くして用あるなり。然るに珍愛する所の者は必ず非常の物なり。夫れ君子の文に於けるや豈に是に異ならんや。今、後進の文を為るに、能く深く探ぐりて力めて之を取り、古の聖賢の人を以て法と為せば、未だ必ずしも皆是ならずと雖も、もし司馬相如、太史公、劉向、楊雄の徒の出ずること有らば、必ず此によりて、常に循うの徒によらず。もし聖人の道は文を用いざれば則ち已む。用いるときは則ち必ず其の能くする者を尚ぶ。能くする者とは他に非ず、能く自ら樹立し、因循せざる者是なり。文字有りて來、誰か文を為らざらんや。然るに其の今に存する者は必ず能くする者なり。

漢代の文学の最高峰に立つ文学者として司馬相如、太史公、楊雄をあげるのは、「孟東野を送るの序」であったが、ここではこの三人に劉向を加えている点が異っている。〈彼等が文章に深く工夫をこらしたからその名聲が遠かに及んだのであり、もし彼等が世の俗流と浮沈をともにして自立することがなかったならば、そうはならなかったであろう。物にしても、それが珍重され愛翫されるのはそれが常ならざる物であるからであるが、文章とておなじである。古代の聖人賢者の心をもって文章の心としなければならぬが、その聖賢の道にしても文章表現がなければどうしょうもない。文学に堪能な者は従来の因循な文章法則によることなく、卓然としてみずから樹立する者でなければならぬ〉と、韓愈は文章表現における独異性と作家としての自立性をあらためて強調する。

世の俗流と浮沈をともにして安きにつくことを拒絶する文学者の気慨が、ながい歴史的時間という巨視的な展望を包摂することで、ここにふきだしている感がある。文章表現が近視眼的に俗流との結托をはかるかぎり、それは歴史的時間に耐えられないとする確信である。その確信を勇気づけるように、その時の韓愈の脳裏を去来したのは、孔子の「言はずんば誰か其の志を知らん。言の文無きは行われて遠からず」（左伝襄公二十五年）ということばであったであろう。平らかならざるものが内にあるために文学として善く鳴ることと、文章表現に深く工夫をこらすことは韓愈の文学にとって二者択一のものでなかった。この二者は背理することなく一次元に統一されねば歴史的時間に耐えられぬものとして韓愈は文学を観念していた。古の聖賢の正統な思想が断絶している今、それを継承しょうとする志が俗流と異なる文体のなかで息づくことで、独創的な文章世界を構築できるという確信がなければ、かかる発言は不可能である。

韓愈が確信にみちているのは現実にたのむところがあるからではない。たしかに、孟郊がいて張籍、李翺が韓愈の志す文学の道に共鳴し、同友として後輩としてつづいているし、それはまた李華、蕭穎士、蘇源明、元結、獨孤及、韓會、梁肅、蕭存などの先覚者が歩き踏みしめ、少しづつ開拓してきた道であった。それでも韓愈が自信をもって世にとうた作品が世俗にいれられず、却って彼自身があきたらぬと考える表現がよしとされる文学情況のなかで、やはりその道は細くそのゆくてはけわしいものであった。たのむところのない道にあって、韓愈が寂莫であり孤独なたたかいを自覚せずにはいられなかったのは当然である。その自覚が韓愈の内部に産みおとした文学思想が発憤著書の説であり、不平の文学論であり、又、愁思の美学であった。

「孟東野を送るの序」を書いてまもなく、韓愈は監察御史の職にあって、京師の尹・李実の暴政を弾劾したた

めに忌避され、貞元一九年(八〇三)の冬に陽山の令に左遷され、さらに翌々年の永貞元年(八〇五)の秋に江陵府の法曹参軍事に遷されている。その地で、荊南節度使・裴均と湖南節度使・楊憑とが唱和した詩集に韓愈がもとめられて書いた序文に、「荊潭唱和詩に序す」がある。そのなかで韓愈は、「夫れ和平の音は淡薄なるも、愁思の聲は要妙なり。讙愉の辞は工みなり難きも、窮苦の言は好くなり易し。是の故に文章の作るや恒に羈旅草野に発せらる。王公貴人の気満ち志得しが若きに至っては性として能く之を好むにあらず」とのべている。文章が羈旅草野にありて生れるのは、そこに窮苦愁思の聲があるからである。王公貴族のサロンのように満ちたりた環境からは要妙な愁思の聲は発生しないと韓愈はみる。愁思の聲を要妙だとする美意識には、これまでみてきた発憤著書の説、不平の文学論と同根異相の発想がある。

この三位一体ともいえる韓愈の文章美学は彼が若き日に文学に志をむけたときからすでに抱懐されていたものであった。そのことは次にあげる永貞元年(八〇五)、江陵府にあった韓愈が江西観察使より兵部侍郎に栄転してゆく李巽にあてた書簡・「兵部侍郎に上るの書」にあらわれている。

愈少くして鄙鈍、時事に通暁せず。家貧しく自活するに足らず。挙に応じて官を覓むること凡そ二十年なり。薄命不幸にしてややもすれば讒謗に邁い、寸を進めば尺を退き、卒に成る所無し。性はもともと文学を好む。困厄悲愁するに告語する所無きに因って、遂に経傳史記百家の説を究窮め、訓義に沈潜し句讀を反複し、事業を磨礪して文章に奮発す。

幼い日に父母と死別したのち、自分の養育にあたってくれた兄をなくした韓愈は、「困厄悲愁しても告語する所無き」状態であった。もともと文学好きであった韓愈が自分のくるしみや悲しみを訴える対象を拒否されてか

らは、経書とそれを解釈した伝、史書及び諸子百家の説を読みあさり、そこに指ししめされた教えをかいくぐり、それらの古典的な文章表現の様式を反復頑味することで、自分を文学に発奮させたと語っているのは真実であろう。この状態は自活をもとめて官途をめざし科挙の試にあげられたときに終ったのではない。この書簡を兵部侍郎にたてまつった韓愈はすでに三八歳になっていたが、いまだ一介の地方官にすぎない。科挙の試に合格して、ひきつづき博学鴻詞科に失敗してから十年来、幼少期にあった「困苦悲愁して告語する」対象さえない状態はかたちを変えてつづいている。この書簡も又その不遇の状態を訴えることであてのない聞達を求める手段である。

かかる韓愈にとって困苦悲愁の内面を告語する対象がのこされているとすれば文章表現以外になかったはずである。当世の俗流文学と結托することなく、不遇であっても歴史の審判をまつ気慨でもって独自の文章表現に、韓愈は作家としての行動を賭け続ける。人間が困苦悲愁をなめて内に平らかならざるものをもつとき、はじめてすばらしい音色をかなでることができるという発憤著書の説、そのなかにこそ要妙の美が結晶するとみる愁思の美学が、韓愈の文学思想として形成されてきたことはむしろ当然すぎるぐらい当然であった。これは博学鴻詞科の試に失敗してから元和元年(八〇六)の六月に権知国子博士となって待望の中央政府の官僚に復帰するまでの不遇不平の苦渋にみちた十年余の間、云い換えれば韓愈の二六、七歳から三九歳にかけて徐々にではあるが、ぬきがたく韓愈のなかに形成され、ついに確信されてきた美意識であり文学思想であった。[6]

註①李華の「贈禮部尚書清河孝公崔沔序」に「夫子文章、偃商傳焉。偃商没、而孔伋、孟軻作。蓋六經之遺也。屈平宋玉哀而

傷、靡而不返、六經之道遯矣。」（全唐文巻三一四）とあり、韓會の「文衡」に「論其始則經制之道老莊離之、比諷之文屈宋離之、記述之體遷固敗之。」（新刊五百家注音辨昌黎文集坿韓文類譜第八王銍韓會傳引）とある。

②太田次男氏の「韓愈についての一考察」―特にその官人生活を中心として―（斯文道文庫論集第一輯）

③柳宗元の「石背先友記」は父親柳鎮を顕頌するために、その墓碑の背面にすぐれた友人の略伝を記したものであるが、そこに「梁肅安定人、最能為文、以補闕修侍皇太子、卒贈禮部侍郎」及び「韓會昌黎人、善清言有文章名最高、然以故多謗、至起居舍郎、貶官卒。弟愈文益奇」（増廣註釋音辨唐柳先生巻十二）の記事がある。

④黄雲眉氏の「韓愈柳宗元文学評価」（山東人民出版社版）の85頁から86頁を参照。

⑤陳師道の「后山詩話」に「黄魯直云杜之詩法出審言、句法出庾信、但過之爾。杜之詩法、韓之文法。詩文各有體、韓以文為詩、杜以詩為文。故不工爾」（適園叢書、後山先生集巻廿八）と記るされている。

⑥この小論は「韓愈の表現論」と題する論文構想の一部である。

（一九四七・一一・一四・脱稿）